

SUPPORTER'S REPORT

三重県男女共同参画推進サポーター
活動報告集



三重県

はじめに

一人ひとりが、性別にかかわらず、自立した個人として、その能力と個性を十分に発揮することができる男女共同参画社会……。その実現のためには、社会を構成する基礎であり、生活の基本的な場である地域において、男女共同参画を進める必要があります。

このため、三重県では、三重県男女共同参画推進サポーターを養成し、その活動を通じて、地域における男女共同参画に関する理解の促進や意識の普及に取り組んできました。

この報告集は、男女共同参画推進サポーターが、活動の一端として作成したものです。男女共同参画推進サポーターの活動内容を紹介することも、思いを実現するために一歩を踏み出した女性たちや、地域づくりに積極的に関わり、生き生きと活躍している人たちを紹介しています。

この冊子が、社会での活躍を考えている方にとって新たな一歩を踏み出すきっかけとなり、また、地域の課題解決のヒントにつながれば幸いです。そして、地域における男女共同参画がよりいっそう進むことを期待します。

目次

○三重県男女共同参画推進サポーターって？	1
○こんな活動しました！ (南勢志摩地域) 男女共同参画推進サポーターの活動を報告！	2
○取材してきました！ (桑員地域) 広げよう！やさしさの輪 ママ・スクラブ〜	6
(三泗地域) 立ち上がったお母さん 〜三重西学童保育所〜	10
(鈴亀地域) より活動的になって再出発！ 〜アクティブ亀山〜	12
(津地域) 気負わずに楽しむ！ 〜芸濃井戸端会〜	14
(松阪多気地域) 見えない絆を大切に 〜Cafe茶々〜	16
〜エールの会〜	18
〜だんね会〜	20
(伊賀地域) 広げよう 地域に根ざした思いやり 〜伊賀市民生委員児童委員連合会〜	22
(紀北地域) 地域づくりにかわりたくて 〜女性会議「きほく」〜	24
(紀南地域) 認知症受け入れの施設をこの紀州に 〜エイジハウス〜	26
○サポーターからひとこと！	28

三重県男女共同参画推進サポーターって？

三重県男女共同参画推進サポーターは、県や市町、関係機関と連携・協働しながら男女共同参画に関する理解の促進や意識の普及を行い、地域における男女共同参画を進めるため、三重県知事から委嘱を受け、各地域でさまざまな活動をしている方々です。

この報告集は、男女共同参画推進サポーターが、活動の一環として作成したものです。

●●● 三重県男女共同参画推進サポーター ●●●

(任期：平成25年3月末まで)

地域	市町	名前
桑員	桑名市	高橋 淑子
	いなべ市	門脇 よしゑ
	いなべ市	山本 たか代
	東員町	山崎 まゆみ
三泗	四日市市	石田 壽賀子
	朝日町	稲垣 富美子
	朝日町	片山 和子
	川越町	寺本 詩野
鈴亀	鈴鹿市	寺井 和子
	亀山市	一見 八郎
	亀山市	佐野 孝子
津	津市	小林 小代子
	津市	山岡 勝江

地域	市町	名前
松阪多気	松阪市	菅原 潤子
	松阪市	伊藤 直子
	多気町	岡井 一代
	明和町	山川 孝
南勢志摩	伊勢市	奥野 三智子
	伊勢市	山本 はるみ
	鳥羽市	濱口 和美
	鳥羽市	広野 克子
	鳥羽市	野村 薫
	志摩市	相田 めぐみ
	志摩市	加藤 玲子
	南伊勢町	山本 眞壽美
伊賀	名張市	坪田 公兒
	伊賀市	竹内 文子
	伊賀市	原谷 順子
紀北	紀北町	松生 茂子
紀南	御浜町	温 千奈美
	紀宝町	大原 麗子

どんな活動をしているのかな？

● こんな活動しました！

南勢志摩地域から

男女共同参画推進サポーターの活動を報告！

伊勢

奥野三智子サポーター（以下、SP）は、伊勢市から男女共同参画事業の企画・運営を委託されている「男女共同参画れいんぼう伊勢」の一員として活動しています。

れいんぼう伊勢では、平成24年度は、前年度からシリーズ化したイクメン講座や縁結び応援事業を中心に、若い世代が身近に男女共同参画を感じられる企画を実施しました。また、新しい取組として、伊勢まつりへのブース出展を行い、男女共同参画啓発活動を実施しました。

◆ イクメン講座の「パパスクール」は3回シリーズで

第1回

「仕事も育児も楽しむパパになるう」〔5月19日（土）26名参加〕では、ファザーリングジャパンの八坂貴宏さんによる講義とワールドカフェを実施し、笑っているパパの極意などについて学び、仕事や育児の悩みや楽しみなどを話し合い、交流を深めました。



第2回

「パパと一緒に遊ぼう」〔9月16日（日）パパ19名、ママ13名、子ども33名 計65名参加〕では、井田清子さんによる「絵本から学ぶ育児」と題した講義と、ししかばぶさんによる人形劇&親子ふれあい体操を実施し、会場は笑い声にあふれ、大変盛り上がりしました。

第3回

「子どももママも輝く パパコーチング」〔12月9日（日）14名参加〕では、ファザーリングジャパン東海の飛鷹正範さん、アシスタント久世准生さんによる講義とグループトークを行い、皆出席者10名に鈴木健一市長から、修了証書が手渡されました。アンケートの「パパ友はできましたか」の間に「できた」の声が多く、実際に12月下旬にはパパ友7～8名で忘年会をし、大いに盛り上がったと参加者から報告がありました。家庭や地域で子育てを楽しむパパ友の輪が広がり、次年度のイクメン講座につながればと思います。

◆ 縁結び応援事業

「うましくに伊勢 出逢いのレストラン」〔11月4日（日）男女各30名参加〕は、昨年の参加者の吉川大樹さんに加わってもらい、司会進行を担当いただきながら、若者の視点・感覚で独身の男女が楽しめる内容にしました。

うましくに伊勢シェフクラブによる、ビュッフェ形式のランチの後、「ぐるぐるトーク」による自己紹介、「男女共同参画クイズ」、「フリートーク」を行いました。



また、「ドキドキBOX」を設置し、気になる人宛のメッセージカードを投函すれば、れいんぼう伊勢が連絡役を引き受けるという企画も加えました。

4人1テーブルで、ゆっくりと食事することで会話が弾み、「ぐるぐるトーク」で全ての人との出会いを楽しめたことなどが好評のようでした。

その後は、グループでの食事会や、個人的な交流がもたれたようです。



奥野SPは、各事業にスタッフとして参加するとともに、チラシや手づくり新聞、パネルづくりなどを担当しました。



「男女共同参画」という言葉も知らなかった私が、れいんぼう伊勢の活動に参加して4年目になります。今、こうして活動を続けていられるのは、れいんぼう伊勢の活動が市民目線でとらえられており、とてもわかりやすく、自分のこととして実感できたことと、どんな時でも助け合える、楽しくてあたたかいスタッフのお陰だと思っています。「男女共同参画」は生きていく上で、すべてにつながっていると感じています。

今後も、みんなが活き活きとした生活を送るためのきっかけづくりとなるような活動ができればと考えています。(奥野三智子SP)



伊勢まつり本部席にて救護班



山本はるみSPは伊勢まつりに、伊勢市女性消防団の一員として参加。東日本大震災の発生から2年以上が経ちましたが、男女共同参画の視点からもこの震災を見つめ、さまざまな場で習得した知識と経験を、今後の活動に役立てていこうとしています。

◀ 男女共同参画連携映画祭 (伊勢市)

『RAILWAYS (レイルウェイズ)』〔6月24日(日)〕



▲ 伊勢まつりにブース出展

〔10月6日(土)・7日(日)〕

鳥羽

濱口和美SP、広野克子SP、野村薫SPの3人は、「TOC5（トックファイブ）」（鳥羽で男女共同参画の活動をするグループ）を立ち上げ、平成24年度も毎月1回のペースで集まっては、ゲストを迎えたり、情報交換をしったりしながら、勉強会を続けています。



▲濱口SPは多気町丹生の日替わりシェフキッチン「サラダポール」で、平成24年度からワンディ・シェフとしても活躍中。

▼鳥羽市で初開催された男女共同参画連携映画祭。TOC5も参画しました。
『うさぎドロップ』（6月16日（土））



▲広野SP、濱口SP、押田さん（TOC5メンバー）は地域イノベーション学会大会にも参加しました。（学会員である野村SPは海女小屋「はちまんかまど」（兵吉屋）の業務繁忙のため、残念ながら欠席）



◀大会で発表された、多気町の相可高校を中心とした取組や、地域で輝く女性の力（“女子力”）による取組は、とても刺激を受けるものでした。
〔10月6日（土）〕

○土川禮子（つちかわれいこ）さんを囲む会（11月16日（金））

野村SPのコーディネートで、鳥羽にお迎えしました。

土川禮子さんは三重大学附属中学校等で教職に従事、その後、公立小学校校長、三重県庁で男女共同参画担当職（三重県生活文化庁女性政策審議監）を歴任され、退職後も県内市町において男女共同参画施策に関わり、現在は鈴鹿市男女共同参画審議会会長をはじめ、名古屋経済大学非常勤講師、井村屋グループ株式会社監査役等、さまざまな立場で活躍されています。

最初に土川さんのこれまでの歩みとして、学校現場での管理職経験を経て、政策が『女性問題の解決』から『男女共同参画』へと移り変わる過渡期に、三重県内における男女共同参画の推進に携わり、その礎を作られた当時の話を聞きました。

また、TOC5としての今後の活動と男女共同参画を推進していく上でのアドバイスをお伺いしたところ、

- ・今は実践するところまでいかないといけないが、それには男女共同参画はこういうことなんだとわかった上で、意識『改革』が必要。
- ・男女共同参画社会基本法ができた当時、意識を持った皆さんは勉強し、現在まで活動し続けている。それを次の世代につなげ広げていくために、次の人達とどうやって接点を作り、皆で盛り上がるにはどうしたらいいか。皆から「あの人は特別な人」ではなく、「頑張ってくれて有難いな」と思ってもらえるようにならないといけない。また、次の仲間が入りやすいように、いろんな人と平等に関わり、違う意見の人と話し合う機会も作っていくといい。
- ・男女共同参画で頑張った人各々が更にいろんな分野へと活動の場を広げ、そこで男女共同参画を実





『土川禮子さんを囲む会』にはTOC5メンバーである濱口SP・広野SP・野村SP・押田淳子さん・宮本志津子さんのほか、鳥羽市職員、三重県職員が参加。



践しながら活躍していけたらいい。鳥羽でもそうなれば素晴らしい。

- ・男女共同参画は社会のしくみを変えること。だから、次の人に伝えて、また次の人に伝えて、その中でこまめに実績を作り、一つずつ変えていけばいい。

- ・大変だではなく、夢をもって、楽しみながらやるのが大事。例えば、「育休を取る職員、ワークシェアする会社、ちょっとずつ楽しみながら変えていきませんか?」と。楽しみながらやれば、きっとやれる。少しリラックスしていきましょう。

とエールをいただき、土川先生を囲んでの一時はとても素晴らしい時間となりました。

TOC5がグループとして無理に活動するのではなく、メンバー各自が各々の持ち場で、さまざまな活動を通して周りの方々に男女共同参画を認知していただくという自然体での形も大切であることを改めて理解でき、これからの活動への元気をメンバー全員がいただきました!

○中村幸昭 (なかもらはるあき) 鳥羽水族館 名誉館長を囲んで〔11月16日(金)〕

土川禮子さんを囲む会の後、中村名誉館長に加わっていただき、お話を伺いました。中村幸昭さんは鳥羽水族館を設立し、観光開発による地域振興の先駆けとして貢献されています。旭日小綬章等を受賞され、現在もみえの国観光大使をはじめ、さまざまな分野で、鳥羽水族館名誉館長として国内外を問わず活躍されています。深い専門知識と幅広い見聞からのユーモアあふれるお話に笑いが絶えませんでした。TOC5の活動を応援していただいています。



志摩

相田めぐみSP、加藤玲子SPは、志摩市・三重県・男女共同参画みえネットの協働事業「意思決定の場への女性の参画促進応援プラン」に、志摩市事業企画会議のメンバーとして参加。この事業では、「女性が意思決定の場へ参画する必要性の啓発」と「行動につながる積極性を引き出す」をテーマに、講演会+座談会(カフェ方式)が実施されました。

- ・上野千鶴子さん講演会〔11月8日(木)〕
- ・おしゃべりカフェ〔11月10日(土)、11月16日(金)〕

また、志摩市では平成24年12月に『志摩市男女共同参画推進条例』が制定されました!



南伊勢

山本眞壽美SPが住む南伊勢町では、「男女共同参画基本計画」の策定作業が行われました。

取材してきました！



広げよう！

やわしおの輪

ママ・sクラブ

私たち桑原地域のサポーターは、こんなに身近に、発達障がいのお子さんを持ちながら、その理解を深める活動などをされているグループがあることを知りませんでした。グループの名は「ママ・sクラブ」。

ある日、ママ・sクラブの「わかりあえるってすてきなこと」と題した講演を聞き、お母さんたちの大変さを痛感して、「もっと知りたいね、もっと理解したいね、何か協力できることあるかな？」と思い、是非とも取材をさせていただきたくお願いをしました。まとまった時間がなかなかとれない状況にもかかわらず、メンバーの嶋田さん、山本さん、前田さん、伊藤さん、日下部さん、また、連絡調整役を務めていただいた、いなべ市社会福祉協議会の廣島さんに快く取材をお引き受けいただきました。



☆ママ・sクラブって？

平成18年に子育て支援センターのママ・s Cafeを立ち上げました。このCafeで同じ名前には「子育ての合間にちゅっ」と息入れませんか」「だれでも気軽に立ち寄ってくださいね」という思いが込められています。

翌年から、ただ集まって話を聞くだけでなく、何かテーマを決めて、学習会をしようという話になり、参加者に発達障がいの子どもを持つ母親が多かったことから、「発達障がい」をテーマとして、情報交換や学習会を実施するようになりました。そして、グループの名称も「ママ・sクラブ」に改めました。

☆活動のきっかけは？

平成20年に神奈川県座間市の発達障がい児のキャラバン活動（発達障がい児について、お話や体験を交えて、各地で啓発を行う活動）を学ぶ機会があり、また、同じように発達障がいの子どもを持つ親御さんたちが、自分の子どもや発達障がいについて、理解を深めてもら

う活動を行っていることへ刺激を受けたことがきっかけです。自分たちでもやってみようかと会員同士が声をかけ合い、その年の秋頃から準備を始め、翌年からキャラバン活動を展開しています。

☆活動内容についてお聞かせください

現在は月1回の定例会をしながら、年に数回、依頼のあったころで発達障がいについての理解を深める講演を行っています。

講演の内容は、発達障がいとはどんなものなのかを知ってもらうきっかけとして、発達障がいのある子どもたちの行動や感じ方を模擬体験していただいたり、障がいの特性や関わり方の「じなごを楽しく理解していただきたい」をテーマに「簡単にわがちやまへ」をモットーに工夫しています。



☆活動を続けていく上で、どのような意識を持たれていますか？

発達障がいのある子どもが、日常生活を過ごすのは、困難なことが多いことについてを理解していただき、「パニック＝問題行動」としての捉えはなへ、困っている状況でもっと理解していただく方が、一人でも多く増え、「やむを得ない輪」が広がってほしいと思っています。

☆これまでの活動で苦労したこと、うれしかったこと、得たことは何ですか？

子どもが学校や作業所に通っている時間しか講演活動ができないため、依頼をお断りすることがある中で、申し訳ないという気持ちがあります。

でも、講演後のアンケートでは、多くの方が発達障がいについて関心を持ってくださると、理解を深めたいと思ってくださることがわかり、とても嬉しく思っています。そして、この方々は私たちの力になってくださっていると感じています。

講演を行うことにより、少しでも多くの方に発達障がいの子どもたちを知ってもらって、理解してもらって大切であることに気づきました。また、私たちも講演を重ねることで、人前で話をすることに自信がつかましたし、積極的にもなれました。

☆周りの方たちの反応はいかがですか？

講演を行うことにより、近所の人たちにもママさんクラブの活動を知っていただき、声をかけてもらえるようになりました。



☆地域とのつながりについて

いなべ市社会福祉協議会の方にお世話になりながら、手塚さんな場所での講演を行い、少しずつ地元で根付いていけたらと思います。



半分に切ったペットボトルから周囲を見る
模擬体験の様子

☆現在の悩み、課題を教えてください

新しいメンバーが増えないことが現在の悩みのひとつです。積極的に声かけなどをしていきたいと思っています。

☆今後の活動についてどのように考えていますか?

兄弟姉妹は幼少時から一緒にいるのが当たり前のように、発達障がいを持つ兄弟姉妹に対する違和感はないようです。ですから、小さい頃から、障がい児に接すること、接し方を学ぶことが障がい者への理解を深める上でも重要だと思います。

そこで、社会福祉協議会が指定する福祉協力校の児童や生徒に対し、社会福祉協議会と共同で講演活動をさせていただければと考えています。しかし、現在の講演内容は、大人向けのものがほとんどです。児童や生徒に理解しやすい内容で再編成することが必要だと考えています。



☆防災について何か要望等がありますか?

各家庭で、防災等の取組を考えてみえると思いますが、障がいのある子どもたちが、大勢の方が避難している避難所で生活することは困難だと思います。そのため、障がい者の特性に応じた避難所を設営してもいいと思います。

たとえば、校区ごとにある保育所などは、自分が通っていた場所であるためなじみやすいので、避難所として開放していただければいいのではないかと思います。

☆発達障がいをより深く理解するための書籍を紹介してください

・『自閉症の僕が跳びはねる理由』
会話のできない中学生がつづる内なる心』

東田直樹著 エスコーラル
・『光とともに〜自閉症児を抱えて〜』(ミック)『

戸部けいこ著 秋田書店



発達障がいとは、障がい理解と求められる支援策

発達障がいは、一般的には知的障がいを伴わない「軽度発達障がい」をさす場合が多く、脳の機能的な問題によって起こる発達上の「遅れ」や質的な「歪み」、機能獲得の困難さがあらわれる障がいです。誤解されがちな親の育て方や愛情不足など、外的な要因による性格の歪みではありません。しかし、注意力や落ち着きがなかったり、一つのことには執着やこだわりが強いなど、障がいに起因する行動や言動が理解されずに、周りから問題視されることも少なくありません。

平成16年に「発達障害者支援法」が成立し、その第二条で発達障がいとは、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」で、「発達障害を有するために日常生活又は社会生活に制限を受ける者」と定義されています。

この法律によって、ようやく発達障がいに対する公的な支援や援助の体制が整備されはじめましたが、法律そのものには「留意」や「配慮」「努める」といった言葉が多く、具体性に欠ける部分もあります。今後、行政はもとより、福祉や教育といった、本人や家族の生活に密着した分野での具体的な支援策の充実とともに、地域社会における障がい理解やサポート体制の構築が求められています。

出典：『三重県市町社会福祉協議会 地域福祉活動事例集』

発行 社会福祉法人 三重県社会福祉協議会



立ち上がったお母さん

三重西学童保育所



四日市市北西の郊外にある「三重団地内の「三重西学童保育所」を訪ね、設立に向けて動かれた代表の高橋正恵さん、子どもたちを指導して6年になる主任指導員の佐々木てるみさんたちに、設立時の状況や現在の運営等についてお話を伺いました。

☆学童保育所の設立について

○なぜ設立しようと思ったのですか？

私（高橋代表）は、名古屋から嫁いできて専業主婦として長男を育てていきましたが、サフリーマンだった夫が、突然勤務先の事業を引き継ぐことになり、当時2歳だった長男を預けて仕事を手伝つことになりました。数年して長男が小学校に入学したところ、校区に学童保育所がなかったため、夕方5時、望めばそれ以降も延長保育してもらえない生活から、毎日小学校へ迎えに行き、会社に連れてくる生活に変わってしまいました。1年間その状況で頑張りましたが、この先ずっとというのも厳しいということと設立を思い立ちました。平成15年10月から動き始め、12月には設立のための準備委員会ができました。行政との折衝や事務

の手続き、場所の決定など大変なことばかりでしたが、多くの方の力で順調に進み平成16年4月に開所することができました。

○どうしてこの場所を選ばれたのですか？

元商店街のこの場所を選んだのは、人通りが多く防犯上安心・安全であること、送迎の際に便利であることに加え、家主さんのご厚意もあつたからです。送迎の際の駐車場利用については、周囲の商店にもご理解をいただいても助かっています。



○設備の準備はどうされたのですか？

開所準備金として市から出る予算は、今は100万円くらいですが、当時の上限は30万円だったので、本当にギリギリでした。テレビ、ラジカセ、食器棚など、知人友人からたくさん寄付をいただいていたので助かりました。

私（高橋代表）の母校に、いろいろな備品を譲ってもらえないかお願いしたところ、ちょうど学校の建て替えで不要になるロッカーや本棚があるということで、車で引き取りに行ったりもしました。

☆現在の様子について

○利用児童数などは？

最初、20名で出発したものの、その後3年間は20名を割ってしまい、補助金を返納せざるを得ず、資金繰りが苦しかったです。4年目以降は利用人数が増え、現在は40名を超えています。夏休みなど長期休みだけの利用なども含めた登録児童数は60名程で、指導員8名で保育するまでになりました。3年前から、軽度の障がいがある子も受け入れていきます。

施設も当初は1階だけでしたが、児童数が増えるとともに予算を設備の拡充に使えるようになり、現在は2階も借り受けて保育スペースを広げています。



○保育・運営の方針は？

下校後の時間を家庭的な雰囲気
で、児童も保護者も安心・安全
(施設も含めて)な保育で過ごし
てもらおうというのが、保育・運
営の基本になる考えです。そのた

め、指導員は、月に1回はミーティングをして、子どもたちへの対応について全員が共通認識を持つよう
にしています。

児童は、学校から帰ってきたら、
出欠確認を兼ねて保護者からの連絡帳を出して、うがい・手洗い。
まず宿題をしてから遊ぶというのが基本です。おやつは3時頃です。
中には、学童保育から近くのそろばん塾へ行ったり、学習塾へ行ったりする子もいます。

年間の行事としては、毎月のお誕生会をはじめ、夏季にはバーベキュー&プール、ボウリング大会、学童保育所の2階でのお泊り保育など、冬季にはクリスマス会、餅つき、卒業生を祝う会などがあります。平成24年度は、県から地震体験車に来てもらって地震体験もしました。

○運営に関して考えていることは？

学童保育をつまぐ運営していくには、運営委員と指導員と保護者(父母会)が協力していくことが必要と考えています。

そこで、学童があることを当たり前のことと思わずに、学童の運営は運営委員、指導員、そして保

護者が関わり、存続させるための努力を惜しまず、皆で支えて欲しいという思いを全父母に説明し、理解・協力を得て、平成23年4月から父母会を立ち上げました。

そして、運営委員、指導員、父母会役員が出席して運営委員会を毎月1回開催し、新しい課題がある時には、ここでしっかり話し合いを持つことにしています。これからは、保護者の側から何かを動かして行こうというようになってもらえると思うっています。



取材して感じたこと

三重県の女性の労働力率はM字型で、30〜40歳代が落ち込んでいるのが現状です。女性の社会進出のための法律によるサポートが以前から言われ、産休・育休や保育園の待機児童対策にしても、私たちの子育ての頃を思えばずいぶん進んできましたが、現実的なサポートはまだです。小学校に入学した途端に帰宅時間が早くなり、仕事を持つ両親は「一年生の壁」に突き当たります。

学童保育が「民設民営」で実施されている四日市市で、必要に迫られたお母さんである高橋代表と地域の市議会議員、指導員、保護者が協力して「三重西学童保育所」を立ち上げ、何もなかったところから一歩一歩築き上げ、育て上げられたことにも感動しました。また、「立ち上がることで思いが形になること」、「一歩を踏み出すことで同じ思いを持つ人が集まること」、「周りの方のつながりが大きな力になること」を改めて感じました。

ここで小学生時代を過ごした児童たちが大人になった時、夏休み・冬休みの行事やお泊り保育の楽しかった思い出が心の中に豊かに思い出されることと思いい、とても豊かな気持ちで帰路につきました。



より活動的になって再出発！

アクティブ亀山（旧いどばたクラブ）

亀山市の「いどばたクラブ」は、これまで男の料理教室やヒューマンフェスティン亀山でのブラス出演など、さまざまなかたちで亀山市の男女共同参画の推進に貢献してきました。このたび、より活動的に、さらに積極的に、いっそう能動的に取組を進めるため、「アクティブ亀山」として再出発されました。この再出発を機会にいどばたクラブのこれまでの活動やいどばたクラブ改め「アクティブ亀山」の今後の活動などを紹介します。

☆いどばたクラブ立ち上げの経緯と「アクティブ亀山」について

亀山市に男女共同参画講座という市民講座があり、昭和59年にその講座を受講した方々が「講座だけが終わらせるのはもったいない」として自主的な活動を開始しまし



た。その後、平成13年に男女共同参画推進講座企画会議となり、さらに平成16年には市民の皆さんに親しんでいただけるよう、愛称を募集し「いどばたクラブ」として活動が本格化しました。

平成24年12月には、これまでより活動的に、さらに積極的に、市と対等の関係で取組を進めるため、「アクティブ亀山」として生まれ変わりました。「アクティブ亀山」の新代表は佐野孝子さんと、男女

比バランスも良い組織となっております。メンバーの資格は「意欲があること」の一点で、メンバーは皆熱意にあふれています。

☆「いどばたクラブ」のこれまでの活動について

健康でいきいきと生活していくためには、男性も女性も生きる力をつけることが大切であるという考えで、活動当初から毎年「男の料理教室」を開催しています。この料理教室は、妻に先立たれ苦労された前代表の石原正さんの体験や思いがかたちになったもので、参加者から共感を得ています。さらに料理教室後には、参加者が自由に発言する座談会が設けられ、料理の振り返りや妻への感謝などが語られることによって、思いを新たにし、それぞれの家庭における実践につながっています。

ヒューマンフェスティン亀山などの市の催しではブラス出演を行い、継続的に「いどばたクラブ」の取組を紹介するとともに、亀山市共生社会推進室と協働して運営に携わっています。

また、市内企業を対象としたア

ンケートを2年に1度実施し、その分析を行い、企業におけるワーク・ライフ・バランスの推進等に役立てています。

これらの取組により、地域において次第に男女共同参画への理解が進み、徐々に人々の意識・行動も変わってきたのではないかと実感しています。

☆家族や周囲の方の反応について

ある会員の夫は、妻に先立たれ苦労された石原前代表の話を聞いたり、講演会等に参加したりして、率先してトイレ掃除などの家事に参画するようになりました。夫婦





どちらがこの家事を行うという役割分担はせずとも、気づいた方がする良い夫婦になったそうです。また、どの会員の家庭でも、女性が積極的に社会参加することにより、固定観念にしばられていた夫婦間の意識を変えつつあります。

☆活動を続けてきた中で、嬉しかったこと、得たものについて

亀山市が「共につくるう かめやまの未来」という男女共同参画推進のためのリーフレットを作成しました。このリーフレットは市内の中学校に配付されたのですが、

幼い頃から教育が重要であるという「いどばたクラブ」の思いがかたちになったものであり、非常に嬉しく思っています。また、このリーフレットを利用して、要望のあった学校に出前講座に何う計画もあり、会員たちの今後の生きがいにもなっています。

☆「アクティブ亀山」としての今後の活動や展望について

根気よく各地域で出前講座を行うなど、地域に根付いた取組を行っていきたく考えています。そのためにも、メンバー一人ひとりが、しっかりと学習を行い、育っていくことが必要だと思っています。人材育成の一環として、他の市町の男女共同参画を進める団体と積極的に交流を図っていくことも検討しています。

また、三重県が実施している「男女がいきいきと働いている企業」知事表彰企業が現在のところ、亀山市にはないので、企業アンケートの分析結果などを参考にしながら積極的に企業へ働きかけを行っていきたくと思っています。

限られた予算の中で、事業を効果的・効率的に実施していくために、事業の見直しも不可欠であると思っています。そして少しずつ実績を上げ、「アクティブ亀山」のメンバーも増やしていきたいという希望も持っています。



☆これから地域活動を行うおうと考えている人へのメッセージ

「女性を出しゃばってはならない、私の能力ではとてもできない」というような、奥ゆかしい考え、見方を変えれば消極的な考えをお持ちの方もいらっしゃるかもしれ

ませんが、少しの勇氣を持って、是非一步を踏み出してほしいと願っています。地域活動は、難しいだけではなく、楽しいことや嬉しいこともたくさんあり、自己実現にもつながることを伝えたいと思っています。「アクティブ亀山」は、地域の男女が一步を踏み出せるような環境整備や、彼らが本来持っている力を引き出すお手伝いを引き続き行っています。

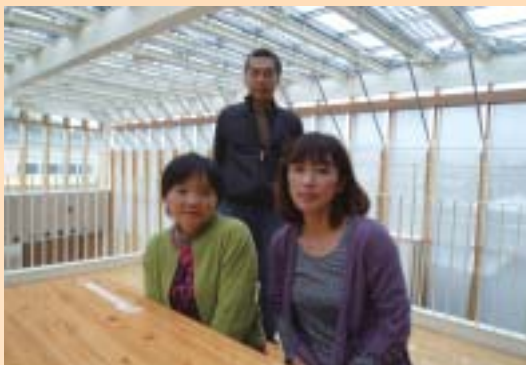


気負わずに楽しむ！

芸濃井戸端会

私たち津地域の男女共同参画推進サポーターは、津市芸濃町で男女がともにいきいきと地域活動をしている団体があると聞き、取材してきました。

お話しくださったのは、「芸濃井戸端会」(以下、井戸端会)の会長 高土稔さんと、会員の 高木啓子さん、 小林由美子さんです。



☆「井戸端会」という名称からは気楽な印象を受けますが、どのような団体ですか？

高木さん 名前はメンバーみんなで考えたんです。

高土会長 芸濃町でいろんなことをやっている人を集めて、町をおこしていこうやないかというボランティア団体で、一生懸命、地域のことを考えていこうという人が集まっています。おばさんの井戸端会議のように、がやがや言いながらやっていこうと、平成13年に発足しました。

☆会のメンバーは？

高木さん 会員数は27名です。女性もたくさんいます。年齢は20代から70代までと幅広いんですよ。製造業、水道、造園などのお仕事をされている人や、市役所の職員もいます。



高土会長 みんな他の団体との掛け持ちは当たり前で、芸濃町で活動するボランティア団体の代表が多数在籍しています。

☆どのような活動をされているのですか？

高土会長 肉体労働が多いですね(笑)。たとえば、芸濃町内のカーブミラーの清掃とか。これは平成16年から毎年続けています。小林さん 紅葉が美しい河内溪谷や、落合の郷といった観光地の清掃もしています。

高木さん 他には、イルミネーションや花火が華やかな、町を挙げての冬の一大イベント「Geino Xmas」にも関わっていて、歴代の実行委員長はほとんど井戸端会のメンバーが務めています。



活動の様子

高士会長 (高木さんを指して)
初の女性実行委員長もこの井戸
端会のメンバーです。

高木さん 実行委員長を引き受け
たときはプレッシャーもありま
したが、周りの支えがあったた
らできたんです。

高士会長 「Greeno Xmas」
は、以前からあった行政主導型
のイベントでは自由がきかず、
自分らの思い通りのイベントに
するには自分らで考えたほうが
いい、と考えて始めましたよ。

☆活動は大変そうですが、
意欲的にできるわけは？

一同 楽しいからー！
高士会長 これが町おこしだ！と
構えたり、義務的にやったりす
ると、楽しくないし続かないで
しょ。

高木さん 仕事や家庭の都合でな
かなか活動の時間がとれないの
が現実。それでも仕事や家事の
段取りをつけて、忙しい中でも
活動に参加するのは、やっぱり
楽しいから！活動が終わった後
の飲み会も、みなさん大好きで
す(笑)。

☆入会のきっかけを教え
てください

小林さん 青森から嫁いできて、
知り合いが誰もいなかったので、
自分のためにも子どものためにも
仲間を作りたくて入会しまし
た。楽しくて続いています。

高士会長 いま、芸濃町で由美ちゃ
ん(小林さん)を知らない人
はいないですよ。
小林さん それは大きいですけど、
確かに、井戸端会に入ってから
は、たくさんの人と知り合えま
したね。この仲間とのつながり



を子どもたちにも伝えていきま
います。

☆ところで、活動資金は
どのように調達されて
いるのですか？

小林さん 会員からの会費(年間
6千円)とイベントで焼きそば
などのお店を出して稼いでいま
す。

高木さん 以前、市の地域振興関
連の事業に手を挙げて助成金を
いただいたこともありましたが、
今はもらっていません。

高士会長 助成金とかをもらうと
活動が縛られるから、やって
楽しくない。楽しく自由な活動
がしたいだけです。

☆自立した活動をされて
いるんですね。今後の
井戸端会の展望をおき
かせください

高士会長 会が発足したときはま
だ30代で、昼間は仕事して、そ
のあと井戸端会で毎晩11時12時
まで話し合ったり、作業をし
たりしていました。50代になっ
た今は体力の限界がきています

(笑)。昔のような関わり方はも
うできないけど……。

高木さん 昔は子ども居場所を
つくったり、花を植えて環境を
よくしたりという活動もしてい
ました。今は自分たちの居心
地のいい場所をつくっているよ
うな感じですよ。これからも、自
分たちが楽しみながら活動し、
それがたまたまみんなのために
もなっていくといいな。私は
「ここが居場所」だと思ってい
ますから。

取材して感じたこと

豪快に笑い、熱弁をふるう高
士会長に、責任を取るのは私た
ちとばかり、ときに冷ややかな視
線を浴びせる高木さんと小林さん。
ワンマン会長かと心配していたら、
取材後「こそり」「会長のことをみ
んなでいじったりしていますが、
ホントはみんな会長のことを尊敬
しているんですよ。人を引っ張る
力がありますもん」と高木さん。
芸濃井戸端会の和気あいあいと
した空気が感じられました。

「気負わずに活動を楽しむ」――
その先に「芸濃町を今以上に住
みよいまちにしたい」との想いが
さりげなく伝わってきました。

見えない絆を大切に

障がい者支援の輪を広げたい

性別に関係なく、それぞれの個性を発揮して、社会に参画していくこと、それが私たちの願い。障がい者ももちろん同じです。今回、私たち松阪多気地域男女共同参画推進サポーターは、障がい者を支援する3つのグループからお話を聞き、それぞれの思いにふれることができました。この記事を書きかけに、支援の輪が広がれば……と思います。

① Cafe茶々 (明和町)



Cafe茶々

明和町馬之上914-1
TEL:0596-53-0039
営業時間
月～金 9:00～16:00

ありんこは、05年、障がい者一人ひとりの障がい特性を見つめ、それぞれの特性に合わせた支援をするこ

☆憩いのカフェ

甘いシフォンケーキと香ばしいみたらし団子の匂い、そして、明るい笑い声……。

ここは「Cafe茶々」。地域の人々に愛される憩いの場所です。2012年4月、「明和町社会福祉協議会 障がい者福祉サービス事業所ありんこ」の一角に新設されました。

とを目標に、明和町馬之上に誕生した、生活介護・就労継続支援B型事業所です。現在の利用者は20代から70代までの男女52人。機能訓練、アルミ缶回収、木炭作り、野菜出荷作業など、それぞれの障がい の程度に応じた活動を行っています。アリのような小さな力でも積み重ねれば大きな力になる、そんな願いを込めた名前に誇りを持って、利用者、スタッフは、日々コツコツと努力を重ねています。

☆きつかけは小さなつぶやき

ある時、ありんこを巣立つて、一般企業へ就労した人がつぶやきました。「休日、知った顔がいるところでホッとしたいけど、気軽に訪ねて来にくくなった。せつかくの休日も、家でひとりで過ごすことになって、寂しい。」

このつぶやきを心に留めていたスタッフは、新棟を建てる話が出た時、「みんながホッとできる場になりたい」「地域の人にも気軽に来てもらって、自然に触れ合えたらいいなあ」と、カフェを思いつきました。



新しい仕事内容が増えるのも魅力的でした。細かい手作業は苦手でも、人当たりが良く、「接客なららせて！」という利用者もいます。絵が上手な人はメニューのイラストを描き、花が好きな人は店内を飾ります。それぞれの特性に合わせた支援”という目標にもピッタリです。こうして、Cafe茶々の新設が決まりました。

☆試行錯誤を繰り返しながら

茶々に関わる利用者は6人。それをサービスマン管理責任者の山田奏さん、管理栄養士の永井明美さん

ら、スタッフが支えています。

まずはできる範囲から始めようと、飲み物のサービスを決めました。しかし、やはり自玉商品はほしい！ 考えた結果、シフォンケーキに挑戦することを決め、永井さんのアドバイスを受けながら、厨房担当の4人は練習に励みました。本を読んだり、YouTubeの動画を観たりして、試行錯誤を繰り返した末に、おいしいシフォンケーキを作れるようになりました。その後、少しずつメニューを増やし、今では、施設内の炭焼き窯で作った自家製木炭を使って、みたらし団子や蕎麦・うどんなども提供しています。

☆地域と密着

ありんこの基本方針は「地域に根ざした施設づくり」。明和町の人々は、そんなありんこに温かく接してくれます。利用者に気軽に声をかけてくれたり、木炭の材料やアルミ缶を届けてくれたり。茶々の開店の際には食器や機材を提供してくれた地域団体や企業もありました。利用者の親が立ち上げたNPO法人「ごんご花」が作る古

代米のクッキーは飲み物のお茶づけとして人気。めいわ市民活動サポートセンターは宣伝活動に協力してくれます。

先日、同センターからの案内で、小学生が訪れてくれました。百田玉を握ってやって来て、ジュースを飲みながら、利用者とおしゃべりをしたり、宿題をしたりして、

楽しい時間を過ごしました。地域と密着し、見えない絆が生まれているのです。

☆失敗があるからこそ

もちろん、まだまだ課題はあります。オーダーを間違えたり、盛り付けがイマイチだったり……。



上：山田奏さん（前列左）と利用者のみなさん
左：手書きのメニューイラスト



「でも、スタッフが全部やらないのが大事なんです」と山田さん。「障がい者に失敗させないようには、守ってあげよう」と言う人がいますが、それは違う。失敗があるからこそ、成功した時の喜びは大きい。同じ人間なのだから、時間をかければ、必ず乗り越えられるんです」。

☆「また来るわ」

「ここが出来て、良かった」「また来るわ」というお客様の言葉が何よりのご褒美。そして、喜んでくれる利用者の姿を見るのが、スタッフたちの喜びです。

これからも、お客様に満足してもらえるように、また、寂しい人の拠りどころになれるように、謙虚な気持ちで忘れることなく、努力を続けなくてはと考えています。皆さん！ 明和町にお越しの際は、ぜひ茶々にもお立ち寄りください。



② エールの会 (松阪市)

☆本当におめでどう?!

「退院おめでどうございます」と、治療を終えられた高齢者をお見送りする時、「これから大変だろうな」という思いが看護師たちの心にあります。「病院から地域に出て、高齢者に寄り添った活動をすべきではないだろうか」と同じ思いの7人の看護師が「地域の医療・福祉」を考え、「安心して暮らせる地域づくり」を目指して立ち上げたのが「エールの会」です。

命名の由来を尋ねると、事務局担当で、初代代表でもある長島秀子さんが教えてくれました。「『エール』とは『声援』のこと。周りの人たちにエールを送りたい、そして、頑張る自分たちにもエールを送りたい、そんな願いを込めました」。

☆高齢者のお手伝い

最初に取り組んだのは、地域の在宅所の運営支援、訪問介護でした。訪問介護は、ALS（筋萎縮性側索硬化症）の奥様を支え24時

間奮闘されていた高齢のご主人に、少しでも自由な時間を持つてもらえるようお手伝いしたいという思いから始まったものです。

エールの会の在宅所運営の目的は、「寝たきりにしない」「認知症にしない」「ひとりぼっちの高齢者をなくす」。公民館などを借り、体操や歌・脳トレを一緒にし、調理ボランティアグループ「花」さんの協力を得て、食事を提供。高齢者たちが明るく、元気に生きるためのお手伝いです。

介護保険制度が始まると、ケアマネージャーの資格取得に挑戦し、医療分野から福祉分野へと転職した会員も多く出ました。

☆障がい児のお手伝いも

こうした地道なボランティア活動を約10年続けた後、周囲からの勧めもあり、2006年5月、NPO法人エールの会として認証を受けました。会員は、看護師、ケアマネージャー、介護福祉士など、医療・福祉分野で働く人が中心でしたが、この頃、新たな出会いが活動の幅を広げました。

障がい児支援サークル「くれっしえんど」代表の落合泰子さんが、同会の趣旨に共感し、入会。同じ頃、松阪市からは「市障がい児サマースクール」の運営委託の打診がありました。「高齢者だけでなく、子どもも大人も、障がいを持つ人も、持たない人も、誰もが安心して暮らせることが大切」と、障がい児支援にも取り組むことを決めました。

☆サマースクールのあゆみ

03年、市福祉課は、障がい児の保護者からの訴えを受け、夏休み中の障がい児の居場所づくりと介護者の負担軽減について検討。翌04年、県の特別支援学校に依頼し、サマースクールを実施しました。

05年には市職員主体で運営し、06年、市町村合併し、新松阪市の誕生を機に、エールの会へ委託。当時、ほとんど受け入れ先がなかった重度障がい児の医療的なケアができる同会は打ってつけだったのです。

サマースクールは、学校とは違い、子どもたちが楽しく1日を過ごす場です。音楽遊びや工作などを講師の協力で実施。昼食は、管

理栄養士、調理のボランティアグループが担当。そして、子ども1人に対し、ボランティアが1〜2人で関わります。

初めて接する子どもものをボランティアにいか理解してもらうかが重要だと考えた同会は、「松阪版サポートブック」づくりに取り組みました。



☆サポートブックって何？

サポートブックとは、障がいを持つ人が自分のことを理解してもらうために支援者に利用してもらう携帯冊子です。香川県の丸岡玲子さんが、自閉症の息子に関わる

人に理解してもらうため、息子の特徴、「コミュニケーションのとり方、癖などを具体的に見やすくまとめたのが始まりです。

「松阪版サポートブック」として、エールの会員、障がい児保護者、行政関係者、社会福祉協議会、特別支援学校教員などがチームを組み、検討を重ねてつくりました。ただし、これはひとつの形式であって、それぞれが使いやすい形にアレンジすればいいのです。今後は、幼稚園、学校などでも取り入れてもらいたいと考えています。家以外での子ども様子もよくわかり、災害時の支援にも役立つことから、社協・市の担当部局とも協働して取り組んでいきます。



☆サマースクールの安定した運営のために

エールの会が運営するサマースクールは、12年で7年目となりました。参加登録している子どもたちは、小・中・高校生の約1000人。1日の定員は15人で、16日実施。抽選の結果、1人が利用できるのは2〜3日です。もっと多くの日数、人数をと思いますが、エールの会の主力メンバーは50〜60代。現在、延べ800人のボランティアやスタッフを支えてはいますが、仕事をもちながら動いてくれている人がほとんどで、後継者不足が悩みの種です。

そこで、今後はサマースクールの運営を実行委員会形式にしてはどうかと考えています。市の担当部局、社協、エールの会、協力してくれる民間事業所や各団体、民生委員代表、学校、幼稚園、保育所を含むボランティア代表等が、率直に意見を出し合いながら運営していくこと、これら相互の協力体制・ネットワークを構築していくことが、サマースクール事業継続のために不可欠だと考えています。

☆タンポポの綿毛のように

「サマースクールに来る子どもたちは、体に障がいがある子、知的な障がいがある子、さまざまです。でも、彼らを障がいの種類・度合いによって分けることはしていません。いろいろな子が一緒にいることで、学びがあつて思つかうです。社会全体でも同じです。性別や年齢、障がいの有無、いろいろな人が一緒にいられる環境づくりが大切だと思いませんか？」と、エールの会で障がい児担当をしている落合さんは周りの人に訴えています。エールの会のシンボルマークはタンポポです。会の思いが綿毛のようにあちこちへ飛んで行き、そこそこで新たな芽を出すこと、そして、人と人をつなげることに、それが願いです。



今回の取材に御協力いただいた
長島秀子さん（右）と
落合泰子さん（左）

③だんね会（多気町）

☆お話しませんか？

月に1度、多気図書館ミーティングルームに、6〜7人の女性が集まります。年齢も職業もさまざま、そのつど顔ぶれも変わる、この集まり。彼女たちの共通点は、障がいを持つ子どもたちの母親であることです。

代表の奥村和美さんは、障がいを持つ次女（小4）の療育先で、多気町外の人と情報交換するようになりました。けれども、一番知りたい地元の情報はほとんど入ってきません。障がい児がいないわけではないはずです。そこで、町民福祉課に相談し、療育手帳（知的障がい者に交付）を持つ子供の保護者宛に、「集まって、お話しませんか？」という案内を送ることにしました。2010年春のことです。

☆だんねえ だんねえ

初めはいぶかしく思う人もいましたが、□□も広がり、3年目の今年のメンバーは約20人。でも、

全員が顔をそろえることは、まずありません。来られる時に来ればいい、というゆるい形に、あえてしてあるのです。

会の名称「だんね会」は、「大事な・問題ない」の方言「だんねえ」から付けました。「構えず、気楽に行こうよ」という思いが込められています。

☆わかりあえる仲間

メンバーの1人、加藤友美子さんはおっしゃいます。「話を聞いて、『大変だな』と言ってくれた友達は大くさんいる。でも、ここへ来ると、『そうそう。うちもあるよ』と、わかってもらえる。同じ思いをし、同じ不安を抱えている人だから、気持ちがあんなに楽になります。また、子どもたちの年齢が、保育園児から高校生と幅広いため、先輩ママから経験談を聞かせてもらうことができず。「うちの子ども、その年齢の頃はそうだったよ」と言ってもらったり、ホッとします。その他、療育や新しくできた施設の様子など、情報交換しながらの

2時間は、いつもあつという間です。わかりあえる仲間、これほどありがたい存在はありません。

☆新たな活動

次女について、地域の人に理解してもらいたいと思っていた奥村さんは、「ごんごん表に出て行かないといけない。もう一歩踏み出したい」と、きっかけを探っていました。そこへ、地元の「あじさいまつり」（12年6月）に参加してみないかという誘いがあつたのは、偶然ではなく、必然だったのかもかもしれません。調理師の資格を持つ奥村さんは、チーズケーキとクッキーの製造・販売に挑戦！その後、7月の「三重県内男女共同参画連携映画祭」、11月の「おいなまつり」と、回を追うごとにパワーアップ！町内の特産物を材料に、おいしいお菓子を作り、「だんね会」の存在も少しずつ知ってもらえるようになりました。



☆心配なのは子どもの将来

お菓子作りに取り組んだもう一つの理由は、子どもたちの将来のためでした。メンバーの一番の心配事は、「成長した子どもたちに働く場があるのか?」「親が亡くなったら、どうやって生活してい

くのか?」ということ。障がい者の受け入れ先の作業所は常に定員いっぱい、生活するのに十分な賃金を得られないこともあるようです。新しい作業所も簡単にはできないでしょう。それなら、自分たちで子どもが働く場を作ってやれないか?お菓子を出すカフェ



上：手作りのお菓子を持つ奥村さん



☆個々の活動も活発に

を作り、働く場にしよう、そんな思いがあったのです。これに賛同したメンバーは、包装用品のデザインをしたり、当日の売り子をしたりと、と奥村さんを盛り立てました。

メンバーの一人、馬場美樹さんは、イギリス発祥の家庭的保育の専門職「チャイルドマインター」という資格を取得し、訪問保育「Happy Color」を運営しています。その他、障がいを持つ次男（小3）の療育先で出会った音楽療法を多くの人に体験してもらうための企画などもして、障がいの有無に関わらず、子どもたちと触れ合い、成長を見守るための活動をしています。

高橋直子さんは、絵本作家の卵。長男（小3）に軽度の発達障がいがあるとわかった時、自分の趣味は封じて、育児に専念しようと決めました。しかし、「得意なことを見つけて、頑張ってください」と言うだけより、自分が頑張る姿を見せた方がいいのでは?と考えるようになり、絵本教室に通い、努力を重ねた結果、念願のデビュー

が決まりました。地元のイラストマップなど、好きな絵を描く母の姿を、長男も喜んでいてそうです。

☆家族、そして地域の理解を

会の活動や個々の育児は、母親だけでは到底できません。夫や両親など、家族の協力が必要です。ある父親は、息子の送り迎えを毎日しています。医院が開く「父子教室」に参加したり、本を読んだりして、理解に努める人もいます。心強い支えです。

そして、さらにはほしいのが地域の支え、理解です。親が家を離れている時に災害が起きたらどうしよう?そんな不安が常にあります。それを解消するには、地域の人たちに理解し、支えてもらうことしかありません。子どもと一緒に、社会参加し、地域とつながって、ともに生きていきたい!それがだんね会の願いです。



広げよう 地域に根ざした思いやり

伊賀市民生委員児童委員連合会

伊賀市社会福祉協議会の会議室。ここで毎月1回開かれて
いる伊賀市民生委員児童委員連
合会の役員会にお邪魔して、
「男女が共に積極的に参画し、
子育て、介護、教育等について
互いに支え合う地域づくり」を
実践されている民生委員児童委
員のみなさんのお話を伺いまし
た。

☆民生委員児童委員とは

民生委員児童委員は、民生委員
法及び児童福祉法に基づいて、厚
生労働大臣から委嘱された、住民
の最も身近な相談相手・支援者で、
社会調査、相談、情報提供、連絡
通報、調整、生活支援、意見具申
といったさまざまな活動を行って
います。個人の秘密を守る義務が
あることから、地域住民には、個
別の相談支援活動など分かりにく
い面もあるようですが、分かりや
すい活動として、いきいきサロン

や、配食、世代間交流会など地域
福祉活動の推進役としての役割も
担っています。

伊賀市の民生委員児童委員の定
数は300人とされており、現在、
男性110人、女性186人、合
わせて296人が活動しています。
この伊賀市民生委員児童委員連合
会は、市内にある14の単位民生委
員児童委員協議会（単位民児協）
から代表が集まり、理事会、なら
びに、地域福祉部会、高齢障がい
部会、児童部会、主任児童委員部
会の4つの専門部会で活動を行っ
ています。それぞれの部会では、
災害時対応マニュアルや事例によ
るQ and Aの作成、障がい児
の日中一時支援や子育て支援など
の活動をするともに、部会研修
を積み、その成果を単位民児協で
の活動へ活かしたりしています。
平成24年度からは、自宅で急に
具合が悪くなったとき、救急隊員
や医療機関などに本人情報を伝え
られるよう、各戸に「わたしの安

心シート」（医療情報キット）を
配布し、民生委員児童委員がシー
トへの記入支援をする取組を行っ
ています。

☆やりがい

こうして民生委員児童委員とし
て活動できるのも、家族や周りの
理解、そして信頼し合える人間関
係があるからだと感じます。一人
ひとりさまざまな状況の中で、あ
らゆる生活上の相談に応じ、関係
機関へのつなぎ役として活動して
いますが、困りごとが解決したと
きに、民生委員児童委員としての
やりがいを感ずります。

また、普段の生活では知りえな
いような制度の内容について知る
ことができたり、体験できないよ
うなことを経験したり、社会と深
くかわり、多くの人とつながり
ができたりにすることもやってい
てよかったですと感じることです。自治
会から推薦され民生委員児童委員
になるのですが、皆さん押し切ら
れてなったという方が多いよう
です。何をやるのか分からないまま
引き受けて、こんなに大変なもの
だとは思っていませんでしたと言われ

る方も。でも、活動の中で地域と
のつながりができたり、人に喜ん
でもらう嬉しさを感じたりしなが
ら、活動されているのではないで
しょうか。



伊賀市民生委員児童委員連合会
会長 平井 つゆ子 さん

☆女性の活躍

連合会の役員は正副会長と書記
の計6名です。うち会長と副会長
2名の計3名が女性です。会長職
を受けるについてはぜひふんと決
断のいることでした。しかし、皆
さんに支えていただき、信頼でき
ること、それに、これまで男女共
同参画の活動をしてきたこともあ
り、男性だから女性だからと言っ
ことはできないという思いもあり
お引き受けることにしました。
民生委員児童委員の約6割が女

性ということ、これだけ女性に出でてもらえているのは、お一人お一人の家庭において民生委員児童委員の活動や男女共同参画について十分理解いただいているということであり、いろいろ制約のある中で上手に活動されているからだと思います。やはり家庭の中での支え合いも必要です。

☆今後について

定員割れの解消が課題です。民生委員児童委員をされている方は、活動を自分のくらしと一体化して、生きがいのようにしている方も多くいらっしやいます。改選期にあたって、そういう魅力を伝えながら、できるだけ長く活動していただけるようにしたいと思います。大変な活動ととらえられがちですが、どうしてもしなければならぬ活動と任意の活動があるので、それぞれの方にあった活動ができることも伝えたいと思います。そして、孤立孤独をなくし、住み慣れたところでいつまでも安心して住み続けることのできる地域社会づくりがいつそう進められるよう願っています。



伊賀市民生委員児童委員連合会の役員の方々

取材して感じたこと

伊賀市民生委員児童委員連合会の皆さんには、日々大変お忙しい中インタビューを快くお引き受けいただきました。

会長さんは女性であり、役員さんも半分は女性、委員の方も6割が女性の方で構成されている。まさに男女共同参画を実現されている団体だと感じました。

地域に根ざした思いやりを持ち、責任とやりがいを感じて日々活動されています。このインタビューを通して、安心、安全なまちづくりの一翼を担って下さっていること、また、民生委員児童委員の皆さまの活動の現状を知ることができました。（竹内文子サポーター）

民生委員児童委員の選出方法や活動内容などを分かりやすく説明して下さい、ありがとうございます。こうして内容が分かり初めて、良いところ、改善したいところが見えてくるように思いました。インタビューでは、時間の都合で役員の方全員のお話をしっかり聴けなかったことが悔やまれます。委員の方々のご苦勞もよく分かりました。（原谷順子サポーター）

地域づくりにかかわりたくて

女性会議「きほく」

テレビや新聞で活動がよく取り上げられている紀北町の女性会議「きほく」のことを知りたくて、代表の中村高子さんにお話を伺いました。

☆立ち上げの理由は？

地域づくりには、住民の地域へのかかわりが大きな意味を持っていて、特に女性の力が求められているんじゃないかなということから、自分たちの学習を通して、地域住民の人間関係を深めたり、地域意識を培ったりして、豊かな地域づくりを進めていくことを目指して、平成9年6月に女性会議「みやま」を立ち上げました。

そして、平成17年11月に海山町と紀伊長島町が合併して町名が紀北町になったので、名称も女性会議「きほく」と変更して今に至っています。私は、平成18年5月に代表を引き継ぎました。

☆メンバーは？

当初は100名くらいの会員がいたんですが、何年か前に、ちょっと申し訳なかったけれど、名前だけの方には遠慮していただいて、実際に活動していただける方だけにしてもらった結果、今は28名になっています。年齢はだいたい50代後半から70歳くらいです。女性会議ができて15年になるけれど、当初からいた人が半分くらいで、途中から入ってきてくれた人が半分くらいです。年齢がちよっと高くなってきているので、なかなか難しいけれど、若い人に入ってもらえたらいいなと思っています。



☆どんな活動をされているのですか？

女性会議ってちよっと固い名前だけど全然難しいことはしていません。気軽に会えます。最近の活動は、町のお祭りである燈籠祭のお手伝いや地区内の清掃などのボランティア活動、地域の方々とふれあうためのガーデニング教室、勉強のための先進地視察などが主なものです。事業は平日にすることが多いんですが、強制していいのに、働いている人も仕事を調整して積極的に参加してくれて、毎回だいたい15人から18人の会員が参加して活動しています。

燈籠祭のお手伝いは、合併して同じ紀北町になったので、紀伊長島の燈籠祭に海山からも参加させてもらおうってことで、お祭りの飾り作りなどのお手伝いに行っているんです。

平成23年度の先進地視察は、中部電力のメガソーラー「たけとよ」や「あいち臨空新エネルギー実証研究エリア」に行ってきました。町内にできた新しい施設の見学などにも行っています。

会員はみんなボランティア精神

が旺盛なので、平成23年の紀伊半島大水害のときには、会員の中から「支援に行こう」という声が出て、一日だけだったんですけど、レンタカーを借りて、運転手さんを頼んで10人で紀宝町に行きました。紀北町役場の職員も3名参加してくれて、一軒家のお家をみんなで夕方まで掃除して帰って来た、というようなこともしています。



☆活動を振り返って？

女性会議は、住民の地域への関わり、女性の力を活かすということを目指していたので、当時の海山町でリサイクルセンターが作られた時には、ゴミの分別のための「ゴミの出し方ハンドブック」の作成などに参加させていただいて、分かりやすく色分けしたらいいんじゃないかと意見を出したりして行政と一緒に検討しました。また、勉強会として、いろいろな施設の見学にも行きました。廃棄食用油で燃料を作る施設なんかも見学に行ったりもしました。それから、当時はまだエコバッグはそんなに言われてなかったけど、会員でエコバッグを作って無料で配布したんです。その後も、買ったエコバッグを無料で配布したりもしました。

振り返ると、女性会議は「ゴミ問題から始まった感じで、「ゴミ」に関してはずっと関わっています。この前は、きれいに使ってくれてありがとう、女性会議「きほく」っていうステッカーを、海山と紀伊長島の全部の「ゴミステーション（ゴミの収集・リサイクル場所）」

に取り付けました。

小さなことばかりかもしれないけれど、地域のために何かできることはないかを考えて活動してきました。



☆男女共同参画について

私たちの世代ではなかなか難しいところがあります。私たちの世代の男性は家事を分担するなんて育っていないし、私たち女性もそれが当たり前で、家のことは自分がちやんぷすと思っただけでやってきたから。家族のためにしっかりとやってきたという思いもあるし。女性会議の会員が、いろいろな活動に参加できるのは旦那さんや家族の理解があつたことなので、私たちの世代の男性であれば、会員を活動に快く送り出してくれることで、男女共同参画に協力してくれているんじゃないかって思っています。子ども旦那さんには、家事にもう少し参画して欲しいなと思いますけれど。

頭では分かっているけど、やっぱり世代によってこれまでの暮らしや思いが違うので難しいところがあると思います。でも、時代も変わって、地域や会社も徐々に変わってきていると感じています。

☆これからについて

海山で立ち上がった会だし、今のところ海山で頑張っているけど、できれば紀伊長島の人たちと一緒に活動をしていきたいなと思っています。

女性会議は、ありがたいことにテレビや新聞でよく活動を取り上げてもらっています。それも長年活動が続いているからだと思うので、大した活動ではないかもしれないけど、会員の健康に気をつけて、これからも地域づくりにかわって、できる範囲で、また楽しんでボランティア活動を続けていきたいなと思います。

取材して感じたこと

女性会議「きほく」の活動などについて、たくさんのお話を楽しく聞かせていただき、1時間半のインタビュー時間があっという間に過ぎました。

地域によって課題や意識がそれぞれ違う中で、地域に合った、地域のための活動をするということとを肩肘張らずに長年にわたって実践している、代表や会員のみさんの思いとその姿勢はすてきなと思いました。

認知症受け入れの施設を

この紀州に

エイジハウス

社会福祉法人エイジハウスの理事として、特別養護老人ホームの施設長とグループホームの管理者をされている山本香代子さん。以前、別の老人ホームで職員として働いていた際に行った調査をきっかけに、この紀州地方には認知症の元気なお年寄りを受け入れる施設がないことを知り、そのような施設があっても良いのではと施設の設立を考えるようになりました。そして、資金もない中、同僚だった前理事長と共に、とにかくやってみようという事で施設の設立に向けて動き出しました。「元気な認知症の方を受け入れる施設を作りたい」という思いで、地域の方や医師、そして親からも資金を募り、このエイジハウスを設立しました。

☆さまざまなる困難を乗り越えて

「少しでも地元で最期まで生活できるような施設を」と、設立したエイジハウス。それまでこの地方の施設で受け入れられなかった認知症の方を受け入れ、設立から1か月ほどで70名の定員はいっぱいになりました。設立当初は元気なお年寄りが多く、建物を囲んでいたフェンスを乗り越えて出て行く利用者さんを職員が追いかけるそんな毎日の中で、夏場には職員みんなが真っ黒に日焼けしていたそうです。今では、利用者さんの年齢層が上がったため、そのようなことは少なくなりましたが。

そんな慌ただしい日々の中、無我夢中で仕事に取り組んだ山本さんと職員の皆さん。「その時その時の失敗を通して学んでいく、そ

んな、形だけでない、本心と身体でぶつかっていく介護、それがエイジハウスの特色だったのかな」と、開設当時を振り返っていました。

最近では、利用者さんと職員の間に関係ができてきているように感じるといふ山本さん。利用者さんが亡くなった時に、自然と職員が涙を流す姿を見て、「これだけみんな思ってくれているんだな、介護の喜びっていうのはこういうことではないのかな」と思われたそうです。エイジハウスでは「もう家に帰ることはできない」という絶望感を抱いて入所されるお年寄りに対し、少しでも第二の家族、第二の棲家、終の棲家として過ごしていただきたいという思いを大切にされています。

☆地域住民とともに

「やはり、自分たちだけで頑張っていけるものではないので、地域の方々に支えてもらって、必要とされる施設でなければいけないと思います」と、地域の方との関わり



社会福祉法人 エイジハウス
三重県南牟婁郡御浜町大字神木23番地
TEL 05979-2-4320 FAX 05979-2-4322



利用者と職員、そして地域の人々が一緒になって楽しむ夏祭りの様子

りを大切にされている山本さん。地域の方にもエイジハウスを知ってもらいたいという思いから、広報誌の発行やボランティア、地域の方を対象とした施設見学、年一回の夏祭りなどをされています。特に夏祭りは、毎年続けていくにつれて、参加者の数も増え、利用者の方ももちろん、地域の方々も楽しみにされているそうです。

☆恩返しを

「ここまでこれたのは、設立の時から、一緒にやってきた前理事長、そして、いろいろな面でご協力いただいた方々のおかげです」と謙遜されながらも、「応援してくれた両親に認めてもらおうと無我夢中でエイジハウスの設立・運営に関わってきたのかな」とおっしゃっていました。子ども頃からおじいちゃん、おばあちゃんと暮らしてきた中で、おじいちゃんおばあちゃんにしてもらったことの恩返しをされているのかもしれない。

今は主に管理職としての立場にいる山本さん。職員からの意見や

提案はなるべく尊重しているそうです。担当する利用者の方にどう関わっていくのかを職員自身に考えさせ、「失敗して気づくことができればいい。だから、失敗するのは大いにいいんじゃない」と、自主性を持った職員の育成を心がけています。

☆男女共同参画について ひまわり

「介護は女性の仕事というイメージがありますが、実はエイジハウスの職員の約7割が男性です。以前は女性が多い職場でしたが、男性が増えてきました。女性の方がはつきりと意見を言ったり、反対に男性の方が細かい所に気がついたりということもあります。なので、男性だからこの仕事、女性だからこの仕事ということはないのではと思います。」



社会福祉法人エイジハウス
理事 山本香代子さん



取材して感じたこと
これからも、お年寄り、職員の笑顔あふれる職場を目指して頑張っていくってください。

● サポーターからひとこと！

報告集の原稿作成を引き受けて、何かと不安の中で、皆さんに指示をいただきながら出来上がったので、**ちょっと「一安心」**ところです。

防災士試験に合格した。今、女性防災人材育成講座を受講している。**いざというとき、地域のために何が役立つようでありたい**と思っている。

いろいろな地域の方々知り合い、**地道に男女共同参画推進活動**を続けていくことができたらと思います。

いろんな分野から女性として出来ることを学びたく思います。

地域の皆さんとの普段のお付き合い、肩のこらない集い、行事はいいものですね。

自分が勉強させていただいたことを周囲の方に伝えることで、**少しでも**貢献できれば……と思います。

高齢者（80～90歳代）の**男女の労わり**、優しさを実感！

活気のある地域コミュニティをつくっていく上で**男女共同参画の視点**は不可欠です。

初対面の方にインタビューするという経験は、学生時代以来なので、**大変緊張**しました。

つらい大変なことが多いけれど、それを忘れさせてくれるのが子ども、孫です。**私の人生プラス思考**で生きぬきます。

「うれしいことも、つらいことも、起こることはすべて無駄じゃない。どんなことが起こっても必ず人生リカバリーできます。あなたなら大丈夫です」という言葉に**エンパワー**できたと感じた。嬉しかった。

体調中心について物事を考えがちになっている私ですが、少し世界を広げて目を見開いて何が得るものがあるか……と思っています。

柔軟性を持ちながら**いろいろな立場の人**と語り合う機会を作っていくといい。

無理に活動するのではなく、各自がいろいろな活動を通して男女共同参画を認知していただくのが大切ということが、今更ながら理解できました。

発言力を身につけたく努力をしています。**チャレンジ精神**を養いたく思っています。

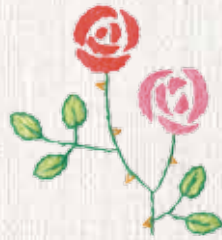
外に出ればまた学べることも多くあります。

防災といえば男の人が上に立ってするものと思っていたのですが、**女性ならではの**気遣いがあるんだなあと思いました。

近い将来はきっと自治会活動で女性がリーダーの座につけるように、そのためにもがんばっていきます。

名ばかりのサポーターでしたが、男女共同参画に対する意識が少なからず強くなったのでは……と、**勝手にプラス思考**しております。

一方通行の啓発であるが、**努力**していきたい。



**三重県男女共同参画推進サポーター
活動報告集**

平成25年3月発行

三重県環境生活部男女共同参画・NPO課

〒514-8570 三重県津市広明町13番地

TEL 059-224-2225

FAX 059-224-3069

E-mail iris@pref.mie.jp

HP <http://www.pref.mie.lg.jp/IRIS/HP/>